

サービスラーニング振り返り

社会福祉学部社会福祉科 小椎尾圭祐

活動先：NPO 法人 もやい

ゼミ：村上 哲也先生

私はサービスラーニングを通して、地域福祉の理解と自分自身の甘えについて考えた。

まず、地域福祉の理解については、地域の特徴という視点からも考えたい。阿久比町の特徴として、近年は丘状の地形を利用し新築の一戸建てが立ち並ぶニュータウンのような街並みが増えつつある。そこに暮らすのは、若い夫婦と子どもという核家族が多く、名古屋まで電車でも車でも30分前後というアクセスの良さからベッドタウンとも呼べるだろう。こうした地域では子どもが多く、保育園・幼稚園は阿久比町だけで10前後も存在する。もやいは、このような地域の特徴をとらえた理念やサービスの提供に心がけている。

小さな地域だからこそ、困った人の何でも屋さんのような幅広く地域に根付いたサービスの展開が有効なのだろう。高齢者のデイサービスだったり、障害児や高齢者のホームヘルプサービスだったり、夏休みの子どもと共に過ごす楽しいイベントだったり、もやいの行っている活動の一つひとつが小さな地域に住む方々の暮らしのお手伝いになっていた。

高齢者のデイサービスは、みんなの顔を見るきっかけでもあり、外出の機会でもあり、楽しみや生きがいでもあり、何より居場所となっている。デイサービスといえば様々なところで行われているが、改めて良さに気付いた事が多かった。

障害者や高齢者のホームヘルプサービスも、生活を支える大きな役割を持つだろう。もやいの活動は実に幅広い。この他にも阿久比町の各保育園・幼稚園と連携し、各家庭の使わなくなったおもちゃを回収して、リサイクルし新しい家庭で使ってもらえるようにする活動や、阿久比町の住民税1%を活用したワクワクコラボ事業にも参加している。デイサービスだけを最高に充実させるより、阿久比町に合っているのは今のままのもやいだろう。もし名古屋のような大きい都市だったら、たくさんの事業所があるから、それぞれが何か一つ特化したサービスを提供して補完し合えばよいが、阿久比町だからこそ幅広いサービスが生きてくると感じた。



たくさんの活動の中でも、夏休みの子どもたちを対象にした活動に魅力を感じる場面が多かった。ガーゼ染め体験の時のことだ。10人くらいの子どもたちが参加しており、自分の好きな色や模様を作るのだが、模様も色も子どもたちは飲み込みが早く、次々と新しい事を思いつくのだ。「子どもだから何かしてあげなくちゃ」と考えていたが、ほとんどの

事はできるだろうし見守ることが大切だと感じた。もちろん危険物を扱うときは大人がすべきこともあるだろうが、子どもにも沢山できることがあるため、そのチャンスを奪ってはいけないだろう。子どもには何かしてあげるのではなく、分からないことは考えさせたり教えて、できることは一緒に楽しむ、このスタンスで関わりたいと思う。子どもからしても、「何かやらなくては」とそわそわしている人に囲まれて活動するよりも、一緒に楽しんでもくれる人たちの隣で活動したほうが楽しいはずだろう。流しそうめんをしたときにも、スタッフやデイサービスの高齢者の方々と一緒に楽しんでいる子どもたちはキラキラしていた。もやいの方ともお話しさせていただいたが、「子どもたちがこの思い出を抱いたまま大人になってほしい」と言っていたが、その通りだと思う。



また、阿久比町内で行ったピザパイ講座では、子どもたちと一緒に調理をして楽しんだのだが、学年ごとに洗う作業や切る作業など難易度を調整することで各学年が参加しやすくなるのだ。みんなで協力することは子どもにとっても協調性の獲得で大事なことであり、より一層おいしくなるはずだ。これがサービ斯拉ーニング最後の活動だったのだが、このときやっと子どもたちと一緒に自分も中に入って行って、

の中でさりげないサポートをしつつ一緒にたくさん笑えた。たくさん活動を通して、子どもたちの好奇心旺盛なきれいな瞳を見ることができた。

また、もやいのサービスが、阿久比町という地域の中でどんな役割を担っているかを考えながら活動に取り組んできて、理念の通りなのだが「暮らしの小さなお手伝い」だと感じた。きっと私が感じた以上に深い意味が込められてこの理念があるのだろうが、少しだけだが感じることもできた。

自分自身の反省ではあるが、一度遅刻してしまい2時間ほど反省の時間をいただいたことがあった。ここで本当に悔しい思いを感じたし、信用を無くすという言葉の深さ、そして重みを感じた。きっとこんな失敗をしないように細心の注意を払うのが一番いいのだろうが、それでもきっと一度は遅刻で大きな失敗をしてしまったはずだ。今回の失敗は、これからの長い人生で教訓にすることが大切なのだと時間がたってから気が付いた。もやいの方に最後に言っていただいた「あなたには素晴らしい人になってほしいから、あえてきつく対応した」という言葉に恥じないように、何事にも誠意をもって生きていきたい。

また、例年は学生ともやいとで企画して何か行っていたそうだが、今年はできなかった。それは、私たちが声を上げなかったからだ。サービ斯拉ーニングの報告会で、他の活動報告を聞いて、アクションを起こすという発想すらなかった自分たちが恥ずかしかった。

私はこのサービ斯拉ーニングを通して、もやいやサービ斯拉ーニングセンターの方が学んでほしかったようなことを学べたかは分からないが、学んだことは大きかった。来年度は実習もあるが、誠意を忘れず取り組みたいと思う。